

私はこう 考^える

カリキュラムは
だれが作る？

おいしいカリキュラムのつくり方

辰巳 豊
(アート教育実践家)

ここでは、筆者が実践してきた小学校の図画工作科〔学習分野・アート〕^{注1}において、どのようにカリキュラム（題材開発）を作ってきたかを報告することとします。皆様がかかわっている幼児の教育活動にとつても何かのヒントになることを願っています。

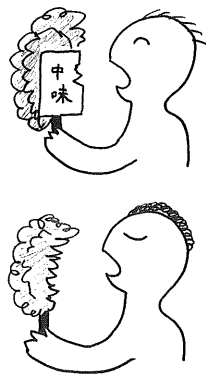
小学校では伝統的に八つの教科が存在し、それぞれが個別に独立しているのが長い伝統です。近年は、子どもを全体的にとらえようと、その枠組みが緩やかにになり、総合的・横断的な取り組みも増えてはいますが、やはり自分の領分を意識し続けているのも変わらない事実です。

ここで、図画工作科の教科特性というものを考えてみます。ちよつと衝撃的な発言になりますが、その特性とは中味が無いことです。算数を学ぶことにより、計算技術を身につけたり量を感覚的に理解したり数理的な思考を發展させたりと、実利としてのスキル獲得ができます。国語の場合はどうでしょう。言葉の習得に始まり、文章構造の理解、書かれています内容の読み取りによる情緒的な感情の育成など、その後の生活にとつて確実に生きる糧になるものを獲得していきます。こういった直接的な収穫物が無いことが、図画工作科を取り組みにくい教科の一つ

辰巳 豊（たつみゆたか）

保育現場のアート教育と子どものデザイン教育の接点に興味があります。
造形教育センター第25代委員長。元お茶の水女子大学附属小学校教諭。

にしているのだと考えます。

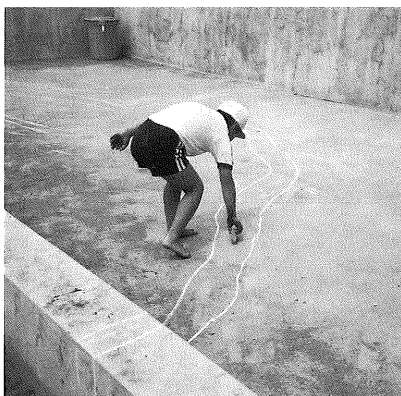


▲最後までおいしい図工

「今度の図工は何やるの？」期待を持って尋ねてくる子どもの純粹な質問に対して「お楽しみに」と明快な応答ができず、とつさに濁った答えをしてしまった経験は、熱心な図工教師ならば誰もが思い当たるはずです。その図工教師は決してさぼっているわけではありません。目の前にいる子どもの実態や生活をていねいに観察し、一番ヒットする題材を常に探し求めているからこそ、答えに窮するのです。教科内容が明確に示されていないことは一見マイナスイメージとしてとらえられるでしょう。しかし見方を変えれば、教えねばならない中味を意識するのではなく、楽しさや心地よさを味わい尽くすことが許されるのです。そう考えると、題材の可能性は無限ですし、

それがメリットにもなります。

もう少し具体的な例で考えてみましょう。写真はコンクリートの地面に道を描いて遊ぶ一年生の様子です（写真1）。彼は、どこかからか石を見つけてきました。そして自分がチョークで描いた道の上を走らせ始めました。ブーブーという走行音付きです。彼の身体、思考は一台の自動車になりきっています。



▲写真1 『自動車世界』に没頭する
(市川市立幸小学校1年生)

架空の世界の中での話ですが、彼は『自動車世界』にその時点で住んでいるのです。彼の欲する自己実現がなされていると言つていいでしょう。

次の写真です（写真2）。三年生が屋上で短冊状に切った新聞の折り込みチラシをつないでいます。風にそよぎ、長く延び、フェンスに結び付き……と紙はまるで生き物のようです。ここで子どもは何を考えてそういう行動をしているのでしょうか。



▲写真2 心地よい『ひらひら世界』
（目黒星美学園3年生）

設計図を思い描く暇はありません。それよりも前に身体が反応してしまうのです。ある日ある時、自分が生きているその場を楽しみ、心地よさを味わっているように思えます。いわば『ひらひら世界』を

楽しんでいるのです。

もう一つだけ写真を見てください（写真3）。四年生が階段を封鎖？ しています。垂木を組み合わせ、通りにくい道をつくっているのです（この上は屋上なので一時的に階段を占有させてもらいました）。



▲写真3 身を這わせる『くぐり抜け世界』
（お茶の水女子大学附属小学校4年生）

木と木で区切られた狭くて窮屈な世界が誕生しました。そこをくぐり抜けていくという行為は非日常の世界です。身がかがめ、ぶつからないように進んでいく行為に没頭します。そこを通り抜ける心地よ

さは、また格別で達成感があります。『くぐり抜け世界』にどっぷりと浸かっているのです。

さて、この三枚の写真が意味するものは何でしょうか。ここには、図画工作科が狙う根源的なねらいが現れているように思います。それは、心地よさの体感ではないでしょうか。心地よさといっても、三番目の例の『くぐり抜け世界』でもわかるように、それは必ずしも快適なものに限定しているのではなく、さまざまな現実をすべて受けとめた上での楽しさです。子どもにとつての今そこに生きていること、そのものなのです。

このように自分の生活を見つめ実感する。それも物という確かな存在物を通してからだ全体で感じること。これこそが一見、得体が知れなかったアートの核心なのです。美とか善とかを問う以前に、自分の人生で遭遇したものを受けとめ、実際に存在する物とかかわっていくこと。起こったことを苦と取るでもなく楽と思うでもなく、一つの出来事としてできるだけ純粹に感じ取ること。その行為を通して自

分の在り方を味わっていくこと。それが真のねらいであり、そこから本当の意味の学びが育まれていくのだと思います。

往々にして教師というものは、絵を描いたらこれ、工作をしたらあれ、といったように何かのスキルを身につけてほしいと願うものです。その呪縛から放たれて従前の指導観を捨て、もつと子どもの生の生活に素直に寄り添うことができたならば、どれだけ教師自身が図画工作科の授業を楽しく有意義に行うことができるのと思いません。

注

1 お茶の水女子大学附属小学校では「教科・図画工作科」に代えて身体性を重視した「学習分野・アート」という呼称を平成14年度より使用している。教科は教師側からの働きかけを中心としていたが、学習分野は、子ども側からの学びを大切にしたいという願いが込められている。

2 「学習分野・アート」においては、心身一元論の精神を表すために、ひらがな文字を当てて、心を含むまるごとの存在と位置付けている。